様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２６ 日現在

機関番号：１４３０３
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2020～2022
課題番号：２０Ｈ０１２０２

研究課題名（和文）京都の伝統的美術工芸の近代化に関する総合的研究

研究課題名（英文）Comprehensive Study on the Modernization of Traditional Arts and Crafts in Kyoto

研究代表者
並木　誠士（NAMIKI, SEISHI）

京都工芸繊維大学・美術工芸資料館・特定教授

研究者番号：５０２１１４４６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　8,350,000円

研究成果の概要（和文）：2020年度は、1902年に開校した京都高等工芸学校の初期の様相を共同研究により明らかにした。とくに、近代京都の美術工芸界における、中澤岩太、鶴巻鶴一などの化学者の果たした役割を明確にすることができた。化学者が美術工芸の近代化に果たした役割については、これまで京都だけでなく、他の地域においても明確にされたことがなかった。もう1点は、近代の絵画教育、デザイン教育において画家が作成した教科書がどのような位置を占めたかについての共同研究をおこなった。この研究により、巨勢小石、浅井忠がそれぞれ作成した指導書の果たした役割が明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
今回の研究でもっとも学術的意義が大きいと考えるのは、美術工芸の近代化に化学者さらには文学・歴史など美術工芸以外の専門家がどのように関与して、どのような成果をあげたかを明らかにした点である。これまでの近代研究は、制作者の技術改良や様式展開という美術工芸内での活動に焦点をあてて進められてきた傾向にあるが、本研究では、積極的に美術工芸外からのアプローチについて分析することにより、新たな知見を得ることができた。さらに、化学者に関しては、化学者の方から美術工芸に積極的にかかわった部分と、美術工芸の側から化学者の学知を有効に活用しようと協力を求めた部分をそれぞれ明確にすることができた。

研究成果の概要（英文）：In FY2020, we clarified the early aspects of the Kyoto Higher School of Arts and Crafts, which opened in 1902, through joint research. In particular, we were able to clarify the role played by chemists such as Iwata Nakazawa, the first principal of the Kyoto School of Arts and Crafts, and Tsurumaki Tsurukazu, the second principal. The role of chemists in the modernization of arts and crafts has never been clarified, not only in Kyoto but also in other regions. The first achievement was to clarify this point. The second was a joint research project on the role of textbooks created by painters in modern painting and design education. This research clarified the roles played by the instructional manuals created by the Japanese-style painter Kose Shoseki and the Western-style painter Asai Chu, respectively.

研究分野：美術史

キーワード：近代化　美術　工芸　化学　京都高等工芸学校　美術教育　中澤岩太　浅井忠

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

代表者は、京都の美術工芸が、明治時代以降の近代化をどのように受け止め、対応していったのかに関心をもって研究を進めており、2015 年度から 2018 年度までは科研費(B)「近代 京都の美術工芸に関する総合的研究－制作・鑑賞・流通の視点から－」（以下、前科研）を受けて共同研究を実施した。その結果、近代京都の美術工芸を考えるにあたり必要な史料・作品がいまだ十分に調査・検討・考察されておらず、それらについての個別調査を継続的に進める必要があることと、そこで得た情報をまとめて、京都の美術工芸の近代化の様相を体系化する必要があることが確認できた。

日本近代の美術工芸についての研究は、1984 年成立の「明治美術研究学会」と 1989 年に刊行された北澤憲昭『眼の神殿』（美術出版社）を嚆矢として、佐藤道信『〈日本美術〉誕生 近代日本の「ことば」と戦略』（1996 年、講談社）、同『明治国家と近代』（1999 年、吉川弘文館）など 1990 年代に活発になった。そこでの中心的な関心事は、明治政府の方針として、「美術」やそれを取り巻く諸制度が整備されてゆく過程の検証であり、そのことと現代の美術史研究とのかかわりであった。そのため、話題は明治政府＝東京を舞台とする傾向が強かった。このような 1990 年代以降の研究動向のなかで、代表者および今回の研究分担者・研究協力者は、これまで京都の近代に焦点を当てて科学研究費基盤研究（B）共同研究、京都大学人文科学研究所共同研究など共同研究を実施してきた。その成果は、下記の編著書などにより発表してきた。

『東山/京都風景論』（2006 年、昭和堂）、特集「京都美術曼荼羅」（『美術フォーラム 21』15 号、2007 年）、『近代京都研究』（2008 年、思文閣出版）、『京都 伝統工芸の近代』（2009 年、思文閣出版）、『図案からデザイン－近代京都の図案教育』（2017 年、淡交社）、『京都 近代美術工芸のネットワーク』（2017 年、思文閣出版）、『近代京都の美術工芸―制作・流通・鑑賞―』（2018 年、思文閣出版、並木編、鹿島財団出版助成）

さらに、代表者は、研究分担者・研究協力者とともに、浅井忠、神坂雪佳、中澤岩太、鶴巻鶴一、守住勇魚、住友春翠、染織図案、機械捺染、墨流し染など、近代京都の美術工芸にかかわる展覧会を開催してきた（いずれも於：京都工芸繊維大学美術工芸資料館）。これらの展覧会により、新出資料の位置づけができ、また、京都をめぐる人的ネットワークはかなり明らかになった。しかし、①近代京都の美術工芸に関しては、発掘・紹介・分析されていない作品・史料が多く、場合によっては、それらが失われてゆく状況にあること。②美術工芸の近代化を考えるうえで重要な概念である「図案」に関しては、作品制作の現場が中心的な京都と政府主導の体制のなかで概念化される東京の図案観とに明らかな相違があるにもかかわらず、その差異が明確にされていないままになっていること。③京都の美術工芸の近代化には、外部からの知識・情報の注入が必要であったが、輸入図書や輸入教材など、その活用実態がいまだ十分に解明されていない点が多いこと。④政府主導の輸出工芸とは異なる在野の視点からの在外美術工芸品について検討が不十分であることといった点を自覚するに至ったことが、研究開始当初の背景である。

２．研究の目的

本研究は、上記のような代表者ほかによる調査・研究および展示活動のつみかさねを学術的背景としており、前科研によって得られた新知見を踏まえ、あらたにとりあげる資料類の

分析を通して、京都の美術工芸の近代化を体系的に考察することを目的とした。具体的には、重要な概念である「図案」、貴重な情報源である雑誌・刊行物、近代の美術工芸に大きな影響を与えた舶載の図版・図書、石膏像などの視覚資料について研究をおこない、その実体を明らかにすることを目的とした。これまでの近代美術研究は、制度・概念・用語などの研究からはじまっている。代表者も参加した最近の成果である、国際シンポジウム報告集『「美術」概念の再構築（アップデイト）―「分類の時代」の終わりに』（2017 年、ブリュッケ）がまさに、1990 年代から議論されてきた諸概念の再構築（アップデイト）を図ろうとしていることからも、近代美術研究の中心が、概念・定義の問題であることがわかる。とはいえ、個々の作家・作品をはじめとして、近代を特徴づける学校制度、博覧会あるいは生活形態の変化と美術工芸のかかわりなどについては十分に位置づけられているとはいえない。さらに、明治政府の直接的な影響下に美術学校や博覧会を生み出してきた東京に対して、天皇の「東幸」による危機感のなかで、地場産業の関係者が教育機関の設置を要求し、博覧会を開催するという京都独自の近代における美術工芸の位相の研究は十分ではなかった。そこで、本研究では、近代京都の史資料・作品の発掘・分析を継続的に実施するとともに、図案研究、雑誌・刊行物研究、美術工芸関係の図書資料の調査という新たな着眼点を加えて、近代京都の美術工芸を俯瞰的に体系化することを目的として進めた。

３．研究の方法

本研究では、具体的な下記のような方法をとった。

①作者・作品・史資料の博捜　作者研究、作品研究については、京都市内外の所蔵家からの調査依頼を多く受けたたけ、その調査を継続的に進めた。本研究課題では、作者・作品を孤立させるのではなく、ネットワークとして考えることを目指したため、ひとつのコレクションが形成される過程を重視しつつ調査をおこなった。それにより、中澤岩太・鶴巻鶴一、水木要太郎、寿岳文章などこれまで美術工芸の外側にいるとされていた人物と美術工芸のかかわりが明らかになった。さらに、本研究では京都高等工芸学校同窓会誌『済美』、装濵業界誌『美潢界』など、これまでまとまって考察されることのなかった雑誌の解題と紹介をおこなった。とくにこれらの雑誌・刊行物が制作の現場においてどのような影響力があったかについて明らかにした。

②図案概念の変遷と実態　明治期の美術工芸を考えるうえで重要な概念である図案について、文献面での調査を継続的におこなった。図案集についても芸艸堂、便利堂等の版元での調査も含めて、現存作品の調査・研究を継続しておこなった。また、明治期の雑誌を資料として、東京と京都の図案概念の比較検討をおこなった。さらに図案の懸賞募集について考察して、どのようなモティーフが多く用いられたかについての調査をおこなった。

③教材について　関西では京都市立芸術大学、京都工芸繊維大学、また、関東では東京芸術大学、千葉大学など明治大正期に美術・図案教育を進めた教育機関で購入された欧米の美術図書、図版類、あるいは石膏像などの教材についての調査をおこなった。また、視覚教材としてのガラススライドについても、国内外における高等教育機関における使用実態について調査をおこなった。

なお、本課題では、明治初期の京都で医師として活動して、多くの美術品を購入して帰国したショイベとその購入品についてドイツにおける調査も予定していたが、コロナのために断念した。

４．研究成果

リストにあげた論文、発表のほかに、本課題の成果論文集『近代京都の美術工芸Ⅱ－学理・応用・経営－』を準備しているため、そこに収録する代表者・分担者・協力者の論文概要を以下に記す。

並木誠士（代表者）「京都の美術工芸の近代化と化学者・中澤岩太」では、東京帝国大学工科大学教授から京都帝国大学理工科大学の開設にかかわり、さらに、京都高等工芸学校の設立に尽力した中澤が、近代京都の美術工芸に対して果たした役割を、審査員という立場での博覧会等での活動と参考品としての美術工芸品の公開という観点から論じた。また、**青木美保子（分担者）「染織産業における学者の貢献－大正期の京都高等工芸学校教員の事績に注目して」**では、やはり東京帝国大学工科大学を卒業して、中澤とともに京都高等工芸学校の初期体制を支え、2 代目の校長になった色染科教授の鶴巻鶴一をはじめとする京都高等工芸学校の教員たちが、京都の染織界で技術・意匠の両面にわたって果たした役割について論じた。**上田香（分担者）「日本式ジャカード織機発展の歴史とその独自性」**では、ヨーロッパから伝えられたジャカードの技術が京都の染織の現場における不断の努力によって、明治期から現代にいたるまで産業形態に合わせて徐々に変化していった過程を特許取得の状況を検討することによって論じた。**國賀由美子（分担者）「甲斐荘楠音「舞ふ」をめぐって－水木要太郎「大福帳」の所見から－」**では、甲斐荘楠音の代表作のひとつであり、大正 10 年（1921）の第 3 回帝展に出品された《舞ふ》の成立にあたり、「奈良の生き字引」ともいわれ、古物のコレクターとしても著名であった学者水木要太郎を取り巻く環境が重要な役割を果たしたことを、水木の活動記録であり、交遊録ともいえる大福帳の挿図をもとに明らかにした。**高木博志（分担者）「寿岳文章と向日庵本の時代」**では、京都で活動する英文学者であり、民藝の創始者柳宗悦とも交流があった寿岳文章が生み出した簡素な美しさをもつ私家版向日庵本をとりあげて、寿岳をめぐる人的ネットワークを明らかにしながら、装飾的で美麗な出版物が生まれた経緯を詳細に論じた。**下出茉莉（協力者）「京都宮崎タンス店の取り組み－婚儀道具研究会－」**は、宮崎家具の活動のひとつであり、明治 43 年（1910）頃からはじまる婚儀道具研究会をとりあげ、それに漆芸家の迎田秋悦がどのようにかかわったのかを論じた。**三宅拓也（分担者）「京都商品陳列所による外国品収集」**では、明治後期から大正期における外国製の陶磁器や染織品といった参考品全体を視野に入れて、京都の商品陳列所の購入品が、京都高等工芸学校や陶磁器試験所で参考品として公開されたものに近しいものがあることを明らかにした。**武藤由佳里（分担者）「近代七宝の技法と製作環境を読み解く」**では、明治期の京都の工芸のなかで重要な位置を占めていた七宝における京都を代表する並河靖之を中心に、近代七宝の発祥地である名古屋、並河のライバルともいえる濤川惣助が活動した東京と、それぞれの様相について詳述した。**木立雅朗（分担者）「『五条坂南側町並散華の図』を読む－伊吹弘による鎮魂」**は、京都を代表する陶磁器の生産地である五条坂を例に、清水焼の絵付け業を営む家に生まれ、京都工業専門学校を卒業した伊吹弘による新出資料を用いて場の記憶を辿りつつ、失われた風景を再現させた。**原田喜子（協力者）「1929 年開催「日本民芸品展覧会」の場と人と物をめぐって－「陶器」編－」**では、京都時代の柳宗悦が 1928 ビルで開催した展覧会とそこに展示された陶器作品を通して、この時点での展示の意味について考察した。**山本真砂子（分担者）「明治時代外国人貴賓の京都訪問と美術工芸商」**は、外国からの賓客の饗応に美術工芸品が用いられる例と、そこにおける美術工芸商の役割について考察した。**多田羅多起子（分担者）「表装界が迎えた近代：京都表具業組合誌『美潢界』を読む」**は、明治期、展覧会という制度のなかで日本画の表装がもっていた意味について、業界誌を詳細に読み解くことで明らかにした。**上田文（協力者）「土田麥僊と国画創作**

協会のパトロン吉田忠三郎ー大正期の京都画壇へのパトロネージをめぐってー」では、国画創作協会のパトロンとして知られ、とくに土田麥僊、小野竹喬らを支援した吉田忠三郎について、新出資料を交えて多角的に論じて、近代京都における画家とパトロンの関係を浮彫にした。

岡達也（分担者）「図案の語義と概念の展開に関する研究ー明治期の美術・図案雑誌を中心としてー」は図案の意味の問題について、『大日本美術新説』『京都美術協会雑誌』など明治期の美術雑誌のなかでの使用例を分析することにより変化の実態を示した。さらに、**加茂瑞穂（分担者）「染織意匠としての百合ー明治期の図案資料を中心に**」は、明治時代後半に、新しい図案モティーフとして登場した「百合」に着目して、武庫川女子大学・髙島屋・千總などの染織作品および友禅協会が実施した図案募集に関する資料を用いて京都の染織産業におけるその登場から定着までを分析した。**井戸美里（分担者）「室内装飾のための図案ー花鳥図案と京都画壇（2）**」は、明治時代前期から中期にかけての京都における図案に京都画壇の画家が積極的に関与し、しかも、花鳥を正確に表現することがそこで重要視をされていたことを論じ、さらに、染織品中心だった図案制作が室内装飾に移行する経緯をも示した。**大平奈緒子（協力者）「『小美術』と谷口香嶠、浅井忠の関わり**」は、図案と絵画の両領域で活躍をしたのが津田青楓について、その図案制作のあり方を、青楓が杉林古香、西川一草亭と刊行した『小美術』の分析を通して明らかにした。**前崎信也（分担者）「菊池素空の生涯と芸術**」は、京都高等工芸学校で日本画を非常勤講師として教え、また、陶磁器試験所では図案の指導もおこなっていた菊地素空について、浅井忠とのかかわりなどを示しつつ、新しい作品・資料をもとに伝記的に明らかにした。**和田積希（分担者）「教材としての石膏像ー京都工芸繊維大学所蔵資料より**」は、京都高等工芸学校での図案教育の場において使用された石膏像の購入・活用と現状について現存する資料を博捜して明らかにした。**松尾芳樹（分担者）「京都市立絵画専門学校の教職員**」は、明治時代後期に京都市美術工芸学校の姉妹校として設立された京都市絵画専門学校の教員組織について詳細に分析・紹介し、それに加えて、「絵専騒動」にも詳しく言及して絵画教育を巡る意識や方法の相違をも浮き彫りにした。**田島達也（分担者）「京都市美術工芸学校の女子卒業生耕山細香について**」では、京都市絵画専門学校の姉妹校である京都市美術工芸学校の女子学生耕山コウ（細香）に注目をして、その観点から美術工芸学校の実態を解析した。**前川志織（分担者）「京都の美人画表現の特質と動向：岸田劉生との比較から**」は、近年研究の進んでいる国画創作協会における「グロテスク」と「美人」のかかわりを岸田劉生の麗子像シリーズを手がかりに分析した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計9件（うち査読付論文　6件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 多田羅多起子	４．巻 2
２．論文標題 明治前期における運筆による基礎画力の育成構想 ： 幸野楳嶺の教育理念	５．発行年 2021年
３．雑誌名 広島大学大学院人間社会科学研究科紀要 教育学研究	６．最初と最後の頁 143-151
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 多田羅多起子	４．巻 34
２．論文標題 日本におけるモレッリ法受容の一様相―土居次義による障壁画研究への応用に至るまで―	５．発行年 2021年
３．雑誌名 芸術論究	６．最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 前﨑信也	４．巻 79
２．論文標題 江戸後期から明治期における九谷焼と京焼の相互交流	５．発行年 2022年
３．雑誌名 デザイン理論	６．最初と最後の頁 15-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 岡達也	４．巻 2
２．論文標題 「図案」の語義と概念の展開に関する試論2	５．発行年 2022年
３．雑誌名 京都美術工芸大学研究紀要	６．最初と最後の頁 101-109
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 並木誠士	4．巻 76
2．論文標題 和歌浦図研究－名所風俗図・試論	5．発行年 2020年
3．雑誌名 デザイン理論（意匠学会誌）	6．最初と最後の頁 59-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 並木誠士	4．巻 1
2．論文標題 地方美術館打造的新美術史	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『世界、東亜及多重的現代視野 台湾藝術史進路』（黄蘭翔編、国立台湾美術館刊）	6．最初と最後の頁 225-260
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 加茂瑞穂	4．巻 77
2．論文標題 友禅協会「伊達模様」の募集とその周辺 ： 明治後期・京都における流行創出との関わり	5．発行年 2021年
3．雑誌名 デザイン理論（意匠学会誌）	6．最初と最後の頁 69-83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 岡達也	4．巻 1
2．論文標題 「図案」の語義と概念の展開に関する試論－明治期の図案集を中心として	5．発行年 2021年
3．雑誌名 京都美術工芸大学研究紀要	6．最初と最後の頁 59-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 木立雅朗	4．巻 997
2．論文標題 大学・考古学・埋蔵文化財行政－近現代考古学がつなぐ社会－	5．発行年 2020年
3．雑誌名 歴史学研究	6．最初と最後の頁 14-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　0件／うち国際学会　3件）

1．発表者名 前﨑信也
2．発表標題 “The History of Teabowls from the Perspective of Supply and Demand”
3．学会等名 Virtual Conference: Path of the Teabowl, Alfred University NY（国際学会）
4．発表年 2021年

1．発表者名 前﨑信也
2．発表標題 “Art or Manufactured Products: The Future of Japanese Crafts as a Traditional Industry”
3．学会等名 The 12th International Convention of Asia Scholars (ICAS), Kyoto Seika University（国際学会）
4．発表年 2021年

1．発表者名 青木美保子
2．発表標題 伝統染織資料・技術の保存、復元、活用
3．学会等名 日本家政学会　第73回大会
4．発表年 2021年

１．発表者名 加茂瑞穂
２．発表標題 “Deciphering Edo Period Designs: The Social and Cultural Context of Early Modern and Modern Kimono Pattern Books”
３．学会等名 16th International Conference of the European Association for Japanese Studies（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 井戸美里
２．発表標題 『看聞日記』のなかの室礼
３．学会等名 第57回芸能誌研究会大会
４．発表年 2020年

〔図書〕　計3件

１．著者名 加茂瑞穂・石上阿希	４．発行年 2022年
２．出版社 臨川書店	５．総ページ数 464
３．書名 『西川祐信『正徳ひな形』―影印・注釈・研究―』	

１．著者名 井戸美里ほか編	４．発行年 2021年
２．出版社 昭和堂	５．総ページ数 372
３．書名 『芸術の価値創造―京都の近代からひらける世界』	

１．著者名 中川理ほか編	４．発行年 2021年
２．出版社 思文閣出版	５．総ページ数 750
３．書名 『空想から計画へ　近代都市に埋もれた夢の発掘』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	多田羅　多起子 (TATARA TAKIKO) (10869324)	広島大学・人間社会科学研究科（教）・准教授 (15401)	
研究分担者	前崎　信也 (MAEZAKI SHINYA) (20569826)	京都女子大学・家政学部・准教授 (34305)	
研究分担者	高木　博志 (TAKAGI HIROSHI) (30202146)	京都大学・人文科学研究所・教授 (14301)	
研究分担者	木立　雅朗 (KITACHI MASAAKI) (40278487)	立命館大学・文学部・教授 (34315)	
研究分担者	田島　達也 (TAJIMA TATSUYA) (40291992)	京都市立芸術大学・美術学部／美術研究科・教授 (24301)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	三宅　拓也 (MIYAKE TAKUYA) (40721361)	京都工芸繊維大学・デザイン・建築学系・助教 (14303)	
研究分担者	上田　香 (UEDA KAORI) (50510583)	嵯峨美術大学・芸術学部・准教授 (34322)	
研究分担者	和田　積希 (WADA TSUMIKI) (50746112)	京都工芸繊維大学・美術工芸資料館・研究員 (14303)	
研究分担者	岡　達也 (OKA TATUYA) (50833761)	京都美術工芸大学・工芸学部・講師 (34326)	
研究分担者	中川　理 (NAKAGAWA OSAMU) (60212081)	神戸女子大学・家政学部・客員教授 (34511)	
研究分担者	國賀　由美子 (KUNIGA YUMIKO) (60802840)	大谷大学・文学部・教授 (34301)	
研究分担者	山本　真紗子 (YAMAMOTO MASAKO) (70570555)	京都市立芸術大学・芸術資源研究センター・日本学術振興会特別研究員（RPD） (24301)	
研究分担者	加茂　瑞穂 (KAMO MIZUHO) (70705079)	嵯峨美術大学・芸術学部・講師 (34322)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	倉知　桂子 (KURACHI KEIKO) (80275370)	同志社大学・人文科学研究所・嘱託研究員 (34310)	
研究分担者	武藤　夕佳里 (MUTOU YUKARI) (80388206)	京都芸術大学・日本庭園・歴史遺産研究センター・客員研究員 (34319)	
研究分担者	青木　美保子 (AOKI MIHOKO) (80390102)	京都女子大学・家政学部・教授 (34305)	
研究分担者	松尾　芳樹 (MATSUO YOSHIKI) (80728105)	京都市立芸術大学・その他部局等・学芸員 (24301)	
研究分担者	前川　志織 (MAEKAWA SHIORI) (80805664)	京都芸術大学・芸術学部・専任講師 (34319)	
研究分担者	井戸　美里 (IDO MISATO) (90704510)	京都工芸繊維大学・デザイン・建築学系・准教授 (14303)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関